

## 「人も鳥も」愛したい

行徳野鳥観察舎 友の会 鈴木裕子

すでにご存知のように、千葉県立の行徳野鳥観察舎が昨年暮れの12月27日をもって無期休館となりました。私が行徳の自然に魅せられて半世紀近く……思い返せば、ずいぶん長い年月を観察舎とともに過ごしたものです。

かつてこの地に「行徳鳥獣保護区」を産み出した自然保護運動は、高度経済成長期に東京湾の干潟がどんどん埋め立てられる中、“人か鳥か”というかたちでマスコミに取り上げられました。当時私も所属していた「新浜を守る会」は“人か鳥か”ではなく“人も鳥も”なのだと訴えたのですが、一般には、センセーショナルな方が取り上げやすいようで、反対運動の図式となりました。

いろいろな経過を経て行徳鳥獣保護区が造成され、1976(昭和51)年1月に観察舎ができました。

初めはプレハブの簡単な施設でした。連日人でにぎわい、床が抜けそうになるくらいの状況！放課後鳥を見に来る小学生・中学生の常連さんができ、その中から、今では保護区で活動するNPO法人「行徳野鳥観察舎友の会」の中核になる人材が育っています。

プレハブでは危ないとのことで、1979年、鉄筋3階建ての新観察舎が完成した時はうれしかったこと！何もかもピカピカ。でもしばらくは急に広がってガラーンとした感じでした。だんだんに、少しずつ少しずつ施設の広さが活きてきて、人が集まるようになってきました。

うれしいのは小学生の遠足。最近では年間で20校近い学校がやってきます。にぎやかですし、鳥を望遠鏡の視野にとらえるというだけで喜びます。いまさらながら鳥を見る楽しさを思い出させてくれます。そして小学生の時遠足で来ましたという若いお母さんが、子供連れで来たり、遠足に来たあと子供たちが、両親や祖父母を連れてきてくれたりと、輪が広がっています。また、学生インターンの実習の場として活用され、若者たちの

活気がみなぎっています。さらに、高齢者リタイア組の常連さんは様々な能力を生かして、湿地の回復状況を写真やイラストなどで提供して、活動を助けてくれます。



タヌキを調べるグループ、昆虫班、植物班、水辺の生き物を調べる干潟研究会など、たくさんのグループが生まれ、熱心に活動を続けています。さまざまな講座や展示も増え、近年の観察舎には賑わいが戻ってきていました。

私は「鳥も人も」大切に考えています。人が大切にされなければ、自然を守ることはできない。やはり大事な人は人です。人が集うには場所も必要です。せっかく盛り上がってきたこの賑わい・熱気がしままないためにも、人々が集い、自然の豊かさを学ぶ拠点は重要です。

このたびの観察舎休館にともない、利用者の常連の方々が自発的に「観察舎を愛する者一同」として、観察舎の再開と存続を求める署名活動を始めました。署名は平成28年2月29日現在で、13,267筆が集まっているそうです。県に対しての要望書は13件、日本野鳥の会東京からも出されています。

千葉県の行政改革審議会では当初「存続せず」という方向でしたが、1月19日の審議会では、存続せず解体という案ではありながら、地元の市川市とも協議してはということが付け加えられました。そして2月3日、市川市長から県知事に対し、行徳野鳥観察舎の存続を望むという要望書が提出されました。

日本野鳥の会東京の皆さん！観察舎には入れないけれど、これからも、どうか行徳の自然を暖かく見守ってください。そして、そこに集う人々の拠点の再生について、ご一緒に考えていただければ、とてもうれしく思います。